

《第十九章・時を考察する。》

第四項 [時は本性が欠如すると示す] に二項目がある。[時が自性として成立したことを否定する]、[その理由を否定する] である。

第一項に三項目がある。[章の著述を説く]、[了義の教証と合わせる]、[意味を要約して章の名を示す] である。

第一項 [章の著述を説く]

ここに言う。「諸事物には自性として本性がある。(何故ならば) 事物とは三時制<sup>1</sup>として名付けられる因である故である。ここで三時とは、経部より示されたが、それも事物の拠所を持つものであり、

『事物の本性が生まれて滅した分が過去、生じたが滅していない分が現在と、  
我の事物を得ていない分が未来である。』

と名称を付けた。

これを否定するにあたり、三項目がある。[三時が本性として有ることを総体として否定する]、[自部・他部の主張をそれぞれ否定する]、[世俗名称として三時を設ける方法] である。

第一項 [三時が本性として有ることを総体として否定する] に三項目がある。[過去に相對した・相對していない二時制が本性として成立したことを否定する]、[その正理を他の二時制に適用する]、[他の三つ一組である法(現象)に適用する] である。

第一項 [過去に相對した・相對していない二時制が本性として成立したことを否定する] に二項目がある。[過去に相對した時が本性として成立したことを否定する]、[相對していない時が本性として成立したことを否定する] である。

第一項 [過去に相對した時が本性として成立したことを否定する]

もし、現在と未来の二つが自らの自性として有るならば、二つ(のあり方)を超えない。従って、現在起こった時と未来の二つが過去時に相對したならば、現在起こった時と未来の二つは過去時に有ることになる。(何故ならば) その二つの時が自らの本質として有るならば、その二つが過去に相對したことも自らの性相として成立した本性となるが、それに似た本性は如何なる場所と時間であろうとも間違い

<sup>1</sup> 三時制：過去・現在・未来の三種の時制。

なくなければならばい故であり、本性が他に変化することは何時にも不合理である故である。

『もし、灯明の本質に闇は無いにも拘らず、互いに相反するものとして相対したので、必ずしもそうであるとは限らない。』と思えば。

光と闇が自らの自性として成立した本性であると主張するならば、その二つが互いに無くとも相対したことは、主張命題に似て論証しなければならない故に、それが批判することは無い。

その二つの時が過去時に有るならば、その二つも過去となるが、そう見れば過去も設けられることができなくなる。(何故ならば) 現在より過ぎたことによって過去であり、それに至っていないので未来と設置しなければならないが、現在が無ければそれは適わない故である。

他にも、もし、斯くも説かれた過失を排斥したいと望み、現在起こった時と未来の二つが、その過去時に無いと考えれば、如何様に過去時に相対したとなろうか。そうはならない。

#### 第二項 [相対していない時が本性として成立したことを否定する]

『もし、時を恒常であると言う他教の対論者のようであれば、二つの時は過去に相対した必要は無い。』と思えば。

過去に相対しておらずその二つの時が成立したことは有るのではない。(何故ならば) 芽等の自らの本質を得て、それより老化していないか、過ぎていないことを現在として設けなければならないので、現在が過去に相対していないことは矛盾する。しかしそれ故に、未来も間接的に過去に相対しなければならない。(何故ならば) 現在に至っていないので、未来として設られた故である。時そのものが過去に相対しなければ、他へも相対しなくなるので、何にも相対しない故に、ロバの角のように無いものとなる。

そのように、過去に相対しようと相対しまいと、如何にしても本質として成立していない故に、現在起こった時と未来時の二つの時も自らの自性として有るのではない。

#### 第二項 [その正理を他の二時制に適用する]

その如く、現在に相対した・相対していない過去と未来の二つと、未来に相対した・相対していない過去と現在の二つが自性として成立していないと知るならば、先に、過去に相対した・相対していないという二つが自性として有ることを否定した正理の次第の、まさしくこの論法によって、過去以外の時である「現在と未来の二つを基にして、相対した・相対していないことが自性として有る」とは錯誤させる批判であることも知るべきである。「過去と未来が、もし現在に相対したならば、」

より「それ故に、過去と、未来の時も有るのではない。」<sup>2</sup>までや、「過去と現在が、もし未来に相對したならば、」より「それ故に、過去と、現在の時も有るのではない。」<sup>3</sup>まで、読み方を変化させる。

第三項 [他の三つ一組である法（現象）に適用する]

三時を斯様に分析した次第の論法は、まさしくこれによって上下中の三つや、「等」によって含まれた善・不善・無記の三つや、生住壞の三つや、前後中の三つや、三界や、学道・無学道・その二つの何ものでもない（知覚）の三つや、一や、「等」によって含むまれた二と多一三つ一組に關係する一切についても説明したと知りたまえ。

その一部を語れば、上下の二つが中に、上中の二つが下に、下中の二つが上に相對して。一と二が多に、一と多が二に、二と多が一に相對して、自らの性相として有るならば、その相對が有るその所や時に有ることになり、無ければそれらに相對しないとなる。互いに相對しておらずに有ることも不合理であるので、自らの本質として無いけれど、世間の名称に従って無ではなく、それによって他も知りたまえ。

第二項に [自部・他部の主張をそれぞれ否定する] 二項目がある。[他部（非仏教徒）が主張する時を否定する]、[自部（仏教徒）実在論者が主張する時を否定する] である。

第一項 [他部（非仏教徒）が主張する時を否定する]

「時は本性として有る。（何故ならば）刹那<sup>4</sup>や臘縛<sup>5</sup>や須臾<sup>6</sup>や昼夜等の、別他の意味である単位を具える故である。」といえは。

もし「時」という、刹那等より別本質に留まるものが有れば、刹那等の面から単位を具えると捉えるものであるが、「時」という刹那等の面から捉えられるものが堅固不変に留まることは無いので、そのように留まらない故に、時を自らより別本質である刹那等の面より捉えることはしない。

『何？恒常である時は有るが、それを刹那等が明らかにする。

〈時が構成要素を熟させる。時が衆生を集める。時が眠りを覚めさせる。時より超越することは非常に難しい。〉

と現れる、そのような性相を持つものが有る。』と思えば。

2 「過去と…ではない。」：『根本中論』第 19 章 1 偈から 3 偈までの言葉を変換する。

3 「過去と…ではない。」：『根本中論』第 19 章 1 偈から 3 偈までの言葉を変換する。

4 刹那：最も短い時間の単位。勇者が指を一回はじく六十五分の一の時間。

5 臘縛：時間の単位。刹那の七千二百倍。

6 須臾：時間の単位。一昼夜の三十分の一。

刹那等によって明らかで、捉えられる対象である、堅固不変に留まる時は無い。(何故ならば) 刹那等より別本質として有るならば、認識されるに適うけれど認識されていない故である。

他にも、この時とは、有為か無為の一方が本性として有るのかと考えると、その双方とも

『生』と『住』と『壊』が、成立していない故に、有為は無い。<sup>7</sup> 等によって先に既に否定した故である。それに似た「時」は如何なる量(正しい認識主体)によっても認識されていないので、捉えられていないその「時」が、刹那等の単位によって如何様に名付けられ得ようか。それはできない。

### 第二項 [自部 (仏教徒) 実在論者が主張する時を否定する]

もし、「恒常である時が無いことは勿論真実ではあろうが、色形等の行に依拠して名付けられた時が、刹那等の音声の述べられる対象となる。」といえば。

仮に色形等の事物が無い—それらより別本質の時が何処にあるか。(それは) 無いので、時は色形等の事物に依拠して設けるけれど、先に既に説かれたことと説かれるであろう正理によって、如何なる事物も本性として有るのでなければ、それに名付けられた時を見て、本性として有ると何処でなろうか。(そうは) ならない。

### 第三項 [世俗名称として三時を設ける方法]

ここで、三時とは『四百論註』より

「そこで未来とは、現在起こった時として去っていない(時)である。過去とは、まさしくそれより過ぎた(時)である。現在起こったとは、生じて滅していない(時)である。現在起こった(時)とは、現在において認識される故に主要であるが、そこに至っていないか、超過することによって、様相として置く未来と過去の二つの時は、主ではない。」

と説かれた如く設けられる。

そこで、それに至っておらず、それより過ぎたことによって、未来や過去であると置く(基になる)時が現在であり—然れば現在とは、時の主要な分であるが、他の二つは主ではない。

現在を去っていないとは虚空や兎の角等でもあるので、それを否定する為に阿毘達磨より

「因が有ろうとも起こっていない」

と説かれ、例えば芽の因が有るけれど未だ芽として生じていないか、過ぎていない(分)が未来である。しかし現在において、未来のその拠所が如何なる時にも起こる因が無いことによって、去っていないものは、未来ではない。そのようであれば、

<sup>7</sup> 『生』…無い。: 『根本中論』第7章 33偈。

そこに来ていないのは現在であり、未来であるものは芽等、諸々の結果であるが、諸々の果は、未来時において置くのではない。これにおいて、未来の果であるものとその因の二つとも、自らの行為を為して失壞したのではないので

「因果の二つは、享受し終わっていない」

と、『中辺分別論』等より説かれた。

現在から退いただけを過去であると置けば、虚空等や未来も過去になるので、現在より過ぎたとは、現在が失壞した（分）である。「起こって滅した」とも説かれ、例えば「芽が失壞した」を過去として置くならば、「起こった」とは過去に当てるのではないが、それが過ぎた「過ぎたとなる」芽に当てる。その芽が過去へ去ったならば、果である芽とその因の双方が自らの行為を為して失壞したので、

「因果の二つとも、既に享受した」

と説かれた。

現在とは、芽等が生じ滅していない時であり、その時には自らの因は滅したが、果自体は滅していないので、

「因は既に享受したが果は享受し終わっていない」

と説かれた。

そのようであれば、「芽が失壞した」とは芽が過ぎた時と、「芽が生じていない」とは芽が未来である時と、「芽が成立して失壞していない」とは、芽が現在の時であるので、三時とも、芽等のその事物の「失壞した時」と「生じていない時」と「生じて失壞していない時」の何れであるかを計るのであるが、時の名称を付ける者によって述べられつつある現時点に無いものを、現在ではないと言うのではない。（何故ならば）それは、その述べる者に相対した現在である故である。

然れば、因が前で果が後や、過去は失壞して未来は生じていないと主張しながら、諸々の前刹那は過去であり、諸々の後刹那は未来であると主張することは謬論である。

毘婆沙部は芽等それぞれに三時を三つずつ置く<sup>8</sup>ので、芽は未来と過去の時点でも芽として存在すると主張し、他の事物についてもそのように主張する。

それも法護<sup>9</sup>は、「芽等について未来から現在、現在から過去へ入れば、未来や現在の事物を捨てるが、それらの「時」の実質は捨て去らない。例えば、金の器を壊して他の器にしたり、乳がヨーグルトに変化すれば、形や味が他に変化するけれど、他の色に変化せぬが如くである。」

という。

<sup>8</sup> 毘婆沙部…置く：毘婆沙部は、芽を基体として未来・現在・過去の三時を置き、更に三時それぞれに未来・現在・過去を置く。未来の未来・未来の現在・未来の過去等。

「三つの時に三様相。」『俱舍論』第 2 章 37 偈 1 行目参照。

<sup>9</sup> 法護：古代インド、毘婆沙部の学匠。chos skyob

発音<sup>10</sup>は、「それぞれの時も三時ともの性相を具えはするけれども、(三つの中で)殊更に強い要素によって過去等であると置く。一人の男性が一人の女性に対してより強い欲望を抱いても、他の女性に対して欲望を離れたのではないが如くである。」という。

世友<sup>11</sup>は、「芽等の単一事物であろうとも、未来等それぞれの時点へ移れば未来等として置かれる。一つの染料の点を、一や百や千のサイコロの目としておけば、(それぞれのサイコロの) 目に当てられる如くである」と主張する。

仏天<sup>12</sup>は、「例えば、一人の女性に対する相手に応じて母や娘と述べられるが如く、一事物も前後に相対してそれぞれ別他の時として置く。」

その第一は、(様相の) 変化を語るので数論派 (の主張) となる。第二においては時の性相が顛倒する。第三においては、芽等の法 (現象) より別本質の行為を主張すれば (芽は) 無為となり、同一本質であれば行為を為す為さないの時点がそれぞれに (別として) 無い。第四においては、過去等各々にも前後中の三を三時と言わなければならないので、それぞれの時に時が三時ずつ有ることになるだろう。

他にも、

「過去・未来の時にも芽等が自らの本質として有るならば、『芽等が失壞した』や、『生じていない』と何故するのか」

と『俱舍論註』で否定して、三時の性相を前述の如く語り、「失壞した」と「生じていない」という過去と未来の二つは無事物であると主張する。これは中観帰謬論証派以外の経量部以上の (仏教徒) 自部による主張である。

中観帰謬論証派によっては、三時ともを事物であると承認し、第七章<sup>13</sup>の折に「失壞した」と「生じていない」の二つの時を事物であると論証した如くである。しかしながら、芽等それぞれにおいて三時に三時ずつとすることは認めないので、毘婆沙部とは異なる。この派の三時を芽において表せば、芽は現在であり、それが失壞したことが過去であり、一般に因は有るけれども時々因縁が揃っていないので芽が生じていないことが未来である。

「ならば、芽が失壞した『失壞』は、継続する類似種から起こることは主張するので、その (失壞の) 生じたが滅していない諸刹那は現在となるが、そのようであれば、現在と失壞の二つが相反さないことになる。」といえ、過失は無い。(何故ならば) 芽が失壞した第一刹那目は芽が失壞したのであるが、その類似種である諸々の失壞は、前々 (の失壞) が失壞したのであり、一切の失壞は過去である故である。その「芽が失壞した」は、自らの時点ではそれ自体が失壞したのではないが、

<sup>10</sup> 発音：古代インド、毘婆沙部の学匠。dbyangs sgrog

<sup>11</sup> 世友：同上。dbyig bshes

<sup>12</sup> 仏天：同上。sangs rgyas lha

<sup>13</sup> 第七章：「生住壞を考察する」。

一般に失壞であるので、過去のみである。

そのように、過去の類似種がどれだけ起こったとしても、他の事物が失壞した面から自らの本質が設けられなければならないので、他の二つの時とは大きく違う。その如く、未来の類似種がどれだけ起こったとしても他の事物が生じていないのみの面から自らの本質として設けられなければならないので、過去と現在の二つとは、非常に大きく違う。

そのようであれば現在とは、他の一事物が失壞したことや生じていない面から設けられる必要がない、生じたが滅していない芽のようなものであるので、生じたが滅していない未来の刹那とは大きく違う。

### 第二項 [了義の教証と合わせる]

そのように、三時は性相として有ることが欠如すると示したまさしくそれが、深甚な教証によっても成立したことで、「三時は本性が無いと説かれた一切の善説を本章によって説明したまえ。」と示す為に、了義の教証と合わせた一部のみを表せば、『象腋経』より

「もし諸法（現象）に何か本性が有るならば、声聞とともに勝者はそれを御存知となる。堅固不変の諸法（現象）は苦しみを超える（涅槃を得る）ことはない。諸賢は何時になろうと、戯論が無くなることはない。」

や、『三昧王経』よりも

「法を何千何百と教示して、何十万もの仏陀が過ぎたとしても、法や文字等に尽きることは無く、生が有るのではない。しかれば尽きることは無い。」

や、

「如来が現れる時代に、『弥勒』という勝者が現れ、この大地が金で覆われることが起こるだろう。その時、その『起こる』とは何処に有ろうか。」

と、以前に仏陀が出現して過ぎた時（過去時）に尽きたことと、後に起こる時が自らの自性として存在することを否定したことによって、時は本性が無いと示す。

### 第三項 [意味を約して章の名を示す]

『〈以前に起こって滅した〉と〈未だ起こっておらず再び起こる〉と〈起こって滅していない〉の三時は、自らの性相（定義）として成立したものにおいては全く不可であるが、それが欠如する無本性において非常に合理である。』と思い、二諦への確信を堅固にしたまえ。

「時を考察する」という六偈の我性、第十九章の解説である。